

35 徳川家康と掛川考

— 14年間の原谷史学習会の活動を通して分ったこと —

筆 者 佐藤 収一

1 研究目的

私は掛川市原谷地区で14年前に原谷史学習会を立ち上げ、毎月1回の学習会を実施してきました。実施回数はちょうど150回を数えます（令和4年12月現在）。学習会では原谷を中心に掛川周辺の歴史を取り上げ学んできました。特に、私の住む原谷は平安から戦国期まで国人領主の原氏がいました。群雄割拠の中で原氏は最終的に武田氏に加担しその結果、徳川家康に滅ぼさ



図1 城のある町掛川(資料 図説県史別編3)

れます。これは反面的ですが、その意味で原氏がいた原谷は、徳川家康に大きく影響を受けた土地柄なのです。ところで掛川には、有名な掛川三城【掛川城(図1)・高天神城(図8)・横須賀城(図12)】があります。掛川三城では家康がいずれにも絡む2つの大きな合戦がありました。つまり家康の天下取りにつながる重要な合戦がこの掛川の地にありました。又、「掛川城主一覧系図」(図3)の作成をしてみると、全ての掛川城主が徳川家康とつながりのある家柄である事が分かりました。歴代掛川城主は家康の存在無くして語れないです。しかしながら、掛川市民の多くはこのような家康と掛川との結びつきの深さに余り気づいてきませんでした。これはとても残念な事です。私は掛川なくして天下人家康の誕生はなかったと考えています。静岡市や浜松市の両市とも家康の築いた町だと互いにキャラクターまで作って全国発信のPRをしています。私は掛川の町も両市に負けない「家康の町」という事を具体的に実証していくために、本研究で掛川の歴史を考えてみました。

そこで本研究では、掛川市民をはじめ多くの方々に今まで余り語られてこなかった「掛川は家康の町」を第3章の具体的研究実践事例【(1) 全ての掛川城主は徳川家康に通ず (2) 家康が関わった掛川三城 (3) 家康と西郷局 (4) 家康と原氏】を通して明らかにしようと試みました。

2 研究動機

来年（令和5年）のNHK大河ドラマは「どうする家康」の放映に決まりました。さらに、本年度は掛川市のシティープロモーション市民協働事業「歴史探求の論文」応募の募集がありました。企画内容は掛川のルーツを探ろうという試みです。私は退職後に立ち上げた14年間の原谷史学習会の活動を通して分かった事が色々ありました。それらを基に徳川家康という人物に焦点を当てて掛川の町を考えてみたいと思いました。掛川は家康が

20代・30代の若き頃に活躍した町であり、のちの天下人になる家康に関する多くの逸話や歴史事象が多々残されています。第1章の研究目的でも述べましたが、私は掛川は静岡や浜松に匹敵する「家康の町」だと思っています。これらの動機から今回の研究論文に応募してみようと思い立ったわけです。

3 具体的研究実践事例とその考察

(1) 全ての掛川城主は徳川家康に通ず

掛川城主にはどのような家柄の人物がいたのか。掛川城主一覧系図を作って考えてみようと思いました。「掛川城主一覧系図」(図3)の作成は、令和2年のコロナ禍で日本国中が緊急事態宣言発令中の頃でした。原谷史学習会が中断していた時期です。紙上に掛川城主の大家を落とし込む作業から始めました。1枚におさめる掛川城主一覧系図(図3)は簡単な作業ではありませんでした。そこで、系図一覧のど真ん中に徳川家康(図2)を据えて作業を進めてみました。すると、全ての掛川城主の家系をスムーズに載せていく事ができました。歴代の掛川城



図2 徳川家康像(資料 ウィキペディア)

主は家康と何らかの関わりの深い人物だったり家柄の当主が多いことが分りました。ところで、掛川市民にとって掛川城というと、山内一豊(図3中の⑥)が出てきます。なぜならば掛川城はとすると山内一豊が築いた城だという事で、家康よりも一豊の方が一般的に掛川市民には馴染みが深いです。ですが、私はそれでも「掛川は家康の町」であると思います。なぜならば、あの関ヶ原の合戦前に山内一豊は家康に「家康様に掛川城を差し上げます。ご自由にお使いください」といって天下分け目の合戦勝利に貢献しました。この事の意味からも、やはり掛川城は家康にとって大変関わりの深い城だという事が分かります。さらに、家康の母方の於大の方につながる久松松平家の多くが掛川城主(図3中の⑦⑧⑩⑪)になっています。さらに家康の長男信康の血筋を引いた姫君達と婚姻関係になった小笠原氏や本多氏の子孫が掛川城主(図3中の⑮⑯⑰⑱)になっています。さらには家康の最後の側室だった英勝院(お梶=お勝)の生家につながる太田家が掛川城主(図3中の⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖)を務めています。太田家は掛川藩最後の城主です。さらには家康と結びつきの深い家臣である石川氏や青山氏なども掛川城主(図3中の④⑤⑫)です。初代から3代までの朝比奈氏は掛川城攻防戦で家康と戦った掛川城主(図3中の①②③)です。さらに家康の先祖に当たる松平親氏につながる松平氏の子孫も掛川城主(図3中の⑬⑭⑰⑱)になっています。

このように、何らかの意味で掛川城主の1代目から32代目までの全ての城主が徳川家康と関わりがありました。掛川城主一覧系図(図3)を作成してみて分った事は「全ての道はローマに通ず」をもじって「全ての掛川城主は徳川家康に通ず」だといえます。

(2) 家康が関わった掛川三城

—— 掛川三城とは掛川城・高天神城・横須賀城 ——

静岡市や浜松市には家康の銅像があります。両市はどちらも天下人家康の町である事を自負して全国にPRをしています。では掛川市はどのようなのでしょうか。残念ながら「掛川は家康の町」と言うようなとらえ方をする人はほとんど見当たりません。しかしながら、掛川には家康が20代30代の頃に戦った2つの大きな戦場となった掛川三城(図4)があります。その2つの戦とは、1つには徳川と今川との掛川城攻防戦です。2つ目には徳川と武田との高天神城攻防戦です。この2つの戦いは家康にとってまさに戦国の生き残りをかけた戦いでした。来年の大河ドラマ放映を機会に、掛川の町には、掛川三城と家康にまつわる歴史事象が多々あることから、さらなる家康にまつわる歴史発掘を喚起すべくシティープロモーションの力が欠かせないと思っています。掛川の地で、この2つの戦いでの家康が勝利した意味するところは大変大きなものがあります。つまりこの戦いは、今川氏や武田氏といった2つの巨大な戦国大名の滅亡となった戦いだったからです。高天神城攻防戦では、対の城として家康が築いた横須賀城の存在が大きいと思います。まさに、どうする家康の真骨頂ともいえるべき勝利をこの掛川の地で勝ち得た戦いでした。なぜならば「高天神を制する者は遠江を制す」といわれた高天神城攻防戦での勝利は地政学上からも大きな歴史的価値がありました。以下は掛川三城と家康との関係を具体的な事例を持って実証していきます。

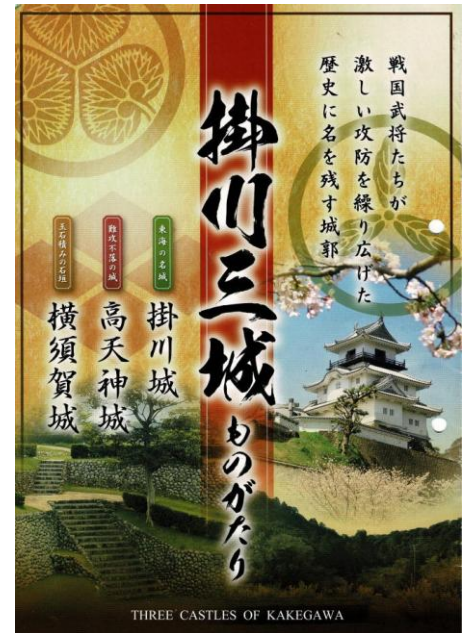


図4 掛川三城(資料 掛川市)

① 家康と掛川城

家康は幼少の頃、人質として今川氏に属していました。桶狭間の戦いで今川義元が織田信長に討ち取られると、家康は今川氏から独立します。そして、家康は織田信長と同盟関係

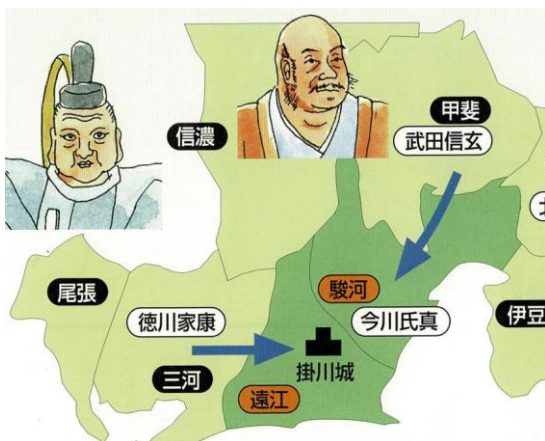


図5 戦国の世の掛川(資料 掛川市)

を結びます。その後の今川氏の衰退と武田氏の駿河侵攻は遠江国の勢力地図を大きく変えていきます。武田の侵攻により今川氏眞は家臣の朝比奈氏がいる掛川城に逃げ込みます。家康にとって、この掛川の地が争いの中心地になっていきます(図5)。その結果、掛川の地は今川と徳川の激烈な攻防戦へと発展します。でもこの掛川城での攻防戦は残念ながら掛川市民の多くは余り知りません。なぜなのでしょう。私はこの掛川城攻防戦についての参考文献や資料がとても少なく、掛川では今まで十分に語られ評価されてこなかったのではないかと考えてい

ます。その中で、今回調べた県史文献資料や昭和16年に書かれた山崎常磐の『掛川城攻防戦』から見えてきた戦いの実態に大きな衝撃を受けました。そのわけは、なんと掛川城を中心に半年間の長きに及ぶ徳川軍と今川軍のあまりに壮絶な戦いがあったことが分ってきました。特に永禄12年(1568)の3



図6 鉄砲玉(出典 掛川市)

月5日の掛川城周辺での両軍の死者の数が1日で160人以上に及んだと県史中世編に記述されています(家忠日記増補追加 県史3652)。この戦いでは鉄砲が使われたことが発掘調査から分りました(図⑥)。又、掛川城の天守台には「霧噴き井戸」と呼ばれる井戸が今も現存しています(図⑦)。徳川家康が掛川城を攻めた時、この井



図7 霧噴き井戸(資料 掛川市)

戸から霧が立ちこめ、城を包み込んで攻撃を防ぎ、城を守ったという伝説があります。掛川城の別名「雲霧城」はこの事が由来です。霧吹き井戸の深さは4.5mです。日本第三位の深さです。※参考(第1位は丸亀城、第2位松山城)

掛川城攻防戦での家康の戦法は掛川城の周囲に陣馬峠や龍尾神社や笠町などの4砦を築いて掛川城を取り囲み、今川軍

の戦意を消耗させた戦法でした。この戦いの最後は和睦という形で掛川城開城により決着が付きしました。これは今川氏の滅亡を意味します。永禄12年(1569)の家康が26歳の時でした。

② 家康と高天神城

高天神城のある大東地域(旧大東町)は、現在は合併して掛川市です。武田信玄の死後、家康側の城だった高天神城を武田勝頼が天正2年(1574)に攻め落とします。家康にとって難攻不落の高天神城(図8)の奪還は簡単なことではありませんでした。家康は持久戦を考え、まずは高天神城への武田からの補給路を断つために城を取り囲むように6砦(小笠山砦・能ヶ坂砦・火ヶ峰砦・獅子ヶ鼻砦・中村砦・三井山砦)を築きました。この



図8 高天神城(資料 掛川市)

囲い込みによる兵糧攻めで高天神の武田軍を追い詰めていきました。遂に、天正9年(1581)3月に武田軍は城から全員が打って出て全滅で終わりました。その時の武田勢の城兵多数を埋葬した千人塚(図9)が土方の小笠橋のたもとにあります。両軍の攻防戦はなんと7年間の長きにわたります。まさに家康の「鳴かぬなら鳴くまで待とうホトトギス」の逸話が見えてきます。少しでも味方の死傷者を出さない戦法でした。こうして家康は掛川から武田の勢力一掃を成し遂げました。この高天神城陥落は一気に武田の衰退を早め翌年に武田氏は滅亡します。この戦いの意味するところはまさに「高天神を制する者は遠州を制する」の戦いでした。



図9 武田の千人塚

この戦いは家康が38歳の時でした。

③ 家康と横須賀城

横須賀城のある大須賀地域(旧大須賀町)は、現在は合併して掛川市です。家康は高天神城の対の城として横須賀城を天正4年(1576)に築きます。横須賀城を築いた頃の徳川・武田の勢力地図(図10)から分かった事は、高天神城が両軍の最前線の城である事が理解できます。家康は横須賀城から高天神城を囲む6砦に食料や武器弾薬を運び込み、城の囲み体制を厳しくする戦法を取りました。又、横須賀城は遠州灘に面しており、武田水軍の動きを牽制する役目を持っていました。武田の水軍

による高天神城への海上からの補給路を断つ意味で横須賀城は地政学上とても効果的な城でした。このように家康は単なる力攻めで相手に対処するのではなく、じっくりと戦況を分析しながら自軍の損害を最小限にして戦う武将だと分りました。家康から命じら



図11 大須賀康高の供養塔(資料 掛川市)

祖となって開いた寺院です。大須賀康高が眠る大きな宝篋印塔が撰要寺境内に今も静かに佇んでいます(図11)。

それ以後の横須賀城主は、幕末の西尾氏まで代々譜代大名が統治するお城でした。中でも第10代横須賀城主の井上正就は老中として活躍した人物です。井上正就は晩年の駿府にいる家康を訪ねた折にあの有名な遺訓である「人の一生は重き荷を負うて遠き道を行くが如し急ぐべからず・・・」の言葉を家康から直に聞き取った人物として今に伝えられています(家康公御遺訓)。このように歴代の横須賀城主は家康から信頼された忠臣である譜代大名が城主に任命されていた事が分かりました。図12

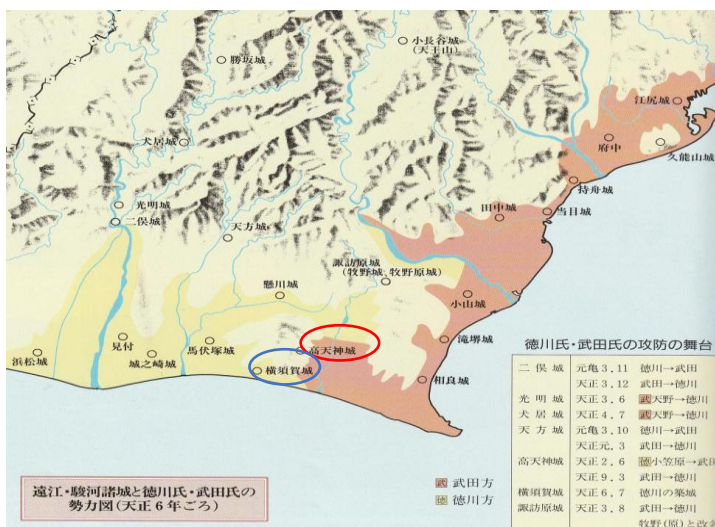


図10 徳川・武田の勢力図(資料 図説県史)



横須賀城(資料 掛川市)

（3）家康と西郷局

家康が武田氏との戦いを掛川の地で繰り広げていた天正6年（1576）に、一人の美しい女性と出会います。後の家康側室となる掛川生まれの西郷局(図13)です。以下は家康と西郷局との関係を具体的な事例で紹介します。



図13 西郷局(宝台院蔵)
(資料 ウィキペディア)

① 掛川生まれの西郷局（2代将軍秀忠の母）

掛川生れの西郷局（お愛）は家康の側室であり、2代将軍秀忠の母親です。西郷局は天文21年（1552）に掛川の西郷村の領主だった戸塚忠春の娘として生まれました。名前を「お愛」と名付けられ、その生誕地は掛川です。家康にとって掛川の地はその意味で特別な地です。西郷局が27歳の時（天正6年）に、その美貌が家康の目にとまり、家康の側室になりました。家康37歳の時です。西郷局は家康に仕えて1年後の天正7年（1579）に長丸（後の2代将軍秀忠）を生み、さらに翌年には福松丸（後の尾張藩主松平忠吉）を生みました。西郷局の名は掛川の西郷村であったことや母方の家名が西郷であった事が語源だと言われています。西郷局は天正17年（1589）に38歳の若さで亡くなります。西郷局の死後に息子の二代将軍秀忠より勅許を得て、従一位一品大夫人の位を贈られています。埋葬された寺名を西郷局の法名をとり宝台院としました。又、孫の3代将軍家光の威光で寛永5年（1628）に朝廷から正一位という最高の位を賜っています。さらにその翌年に即位した明正天皇（女帝）は西郷局の曾孫に当たります。家康が戦に明け暮れた掛川の地は、他方では2代将軍を生んだ西郷局の生誕地という特別な地でもあったのです。

② 掛川龍華院の家光廟（3代将軍家光の祖母は西郷局）



図14 龍華院御霊屋

(資料 掛川市)

掛川古城があった天王山に3代将軍家光の龍華院霊屋(図14)があります。なぜこのようなものが掛川にあるのか。知っている市民は意外と少ないです。第17代掛川城主は家康の甥に当たる北条氏重です。北条氏重は娘ばかりで家督を継ぐ男児がいません。お家断絶を心配した北条氏重は将軍家の威光で家督相続を祈願したと思います。家光の逝去後、氏重は龍華院に家光の御霊屋を建てました。家光は西郷局の孫に当たります。北条氏重は将軍家の力で北条家の家督を守ってもらおうとする意図があったと思われます。しかし、万治元年（1658）に氏重は愛馬の黒馬に乗って鷹狩りに出かけた折りに落馬して一命を落としてしまいます。家臣の一部が黒馬を主君の敵だとして槍で突き殺してしまいました。廃絶録にはこの事が原因で北条家の末期養子が認められなかったとの記述が残されています。これにより掛川城主北条家はお家断絶となります。家康の甥っ子だった北条氏重の残した家光御霊屋が今も保存状態よく掛川の地に現存しています。これも掛川の地における家康威光の遺産の1つだといえます。

(4) 家康と原氏

私の住む原谷は掛川の北西に位置しており、市内最大の原野谷川が流れ、秋には黄金の稲穂が広がるのどかな田園地帯です。平安期には皇室領最勝光院の荘園地があった事が国宝『東寺百合文書』にも残されています。原氏はこの地を源頼朝より地頭として任命され、その後は中東遠の中心となる国人領主として台頭していきます。だが戦国期に原氏は徳川家康に滅ぼされます。以下は家康と原氏との関係を地政学上の観点から説明します。

① 掛川は原氏なり

中世期には原氏が中東遠地方の中心となる勢力を持っていました。その中心地が原谷です。原氏は殿谷城を構えて当地を支配していました。遠江国風土記伝に「本郷は原氏十代の城地也」の文言があります。原谷の堂山墓地には原殿の五輪塔があります(図16)。当時、原氏は地頭の立場から荘園領地を奪取して力をつけていきます。原氏全盛期には室町将軍とも交流があり中央とも結びついていました。原谷には1300年ほど



図15 榛村純一氏(元市長)と著者

者

続く原氏縁の古刹長福寺があります。都の情報や文化が長福寺とかかわる修験僧の往来を通して原氏のいる原谷に入ってきました。又、原谷周辺では「原」と名の付く地名や苗字が多々見られます。地名では原谷、原田、原泉、原川、原野谷川などです。このような原氏の存在を如実に現した言葉を今は故人となられた元掛川市長榛村純一氏(図15)から直接に伺う事ができました。その言葉とは「佐藤さん！掛川は原氏だよ」の一言でした。「そうか！昔の掛川の中心地はこの原谷だったのか」と多少興奮した事を覚えています。ではその後の原氏と原谷はどうなったのでしょうか。

② 戦国争乱後の原氏と原谷



16 本郷堂山の原殿墓地

掛川の原谷周辺も戦国期に入ると群雄割拠の地になります。「遠州」のことを「遠叟」とも書きます。当地では戦国期に今川や武田そして徳川といった戦国大名の覇権争いが激烈でした。「叟」にはこの3大名が刀で領地を取り合ったという意味が含まれています。原氏はまさにこの3大名に翻弄されます。最後には原氏は武田側につき、信玄亡き後の天正元年(1573)に徳川家康に滅ぼされます。原氏が頼りにしていた室町幕府も同年に滅亡します。中世の伝統秩序を守

図

ろうとした原氏は、近代化を推し進める徳川家康の前に終わりを告げます。原氏滅亡後は原谷に城の再建が認められず廃城となりました。以後、原谷は権力中枢の地から外れていきます。だから現在の原谷は掛川

市の中心地ではありません。地政学的に見て、徳川家康が原氏を滅ぼした事は、その後の原谷の発展上の面からみて、大きな負の影響を与えたと考えざるを得ません。

4 研究成果

今回の研究テーマ「徳川家康と掛川考」をまとめてみて、改めて「掛川は家康の町」だとの確信を持ちました。この歴史認識にたどり着けたのは、原谷史学習会を立ち上げ、原谷及び掛川市周辺の原谷史学習会を仲間達と14年間運営し続けたからだと思います。この原谷史学習会で積み重ねてきた発掘資料や調査資料が、今回のまとめに大いに役に立ちました。原谷史学習会の運営を続けてこれた事は、私たちの住む掛川市が全国に先駆けて「生涯学習都市宣言」を行った町だからです。掛川市は小学校単位に学習センターが設置され、気楽にだれもが自由に学びあう文化環境面での活動の場が整っていたからです。

次に「徳川家康と掛川考」に関する成果としては、第1は「掛川城主一覧系図」(図3)を作成できたことです。全ての掛川城主が徳川家康に通じていた事が実証できました。第2は掛川三城はいずれも家康と大きく関わっていた事が実証できた事です。第3は徳川葵3代(家康・秀忠・家光)の要となった西郷局が掛川生まれだったという事です。第4は地政学的に考えると、家康に刃向かった原氏とその本拠地の掛川原谷は、その後の姿を見ると家康から受けた負の大きさが、今現在にまで及んでいることが分りました。

5 研究実践上の今後の課題と提言

来年からのNHK大河ドラマ「どうする家康」放映を前に「徳川家康と掛川考」の研究を進めていく上で次の課題が見えてきました。それは掛川市民の多くが「掛川は徳川家康の町」と考えている人は余りいないことです。掛川にとって家康は、よそ者の存在にとらえている人が多いです。なぜなのだろうかと考えてみました。その原因は掛川の町自体が今までも含めてトータル的にみて、徳川家康との関係を浜松や静岡のように歴史的・文化的にとらえた町づくりをしてこなかったからだだと思います。そこで、私は来年の大河ドラマ「どうする家康」の放映は家康と掛川を考える上で大きなチャンスにとらえています。来年の「どうする家康」の時代考証を務める歴史家の平山優氏(図17)の歴史観に触れる機会がありました。平山氏は「歴史は必ずしも役に立つ、立たないという尺度では測れない。でも人間は何か疑問を持った時、必ず過去を振り返って物事を考える」と語っています。この平山氏の言葉から私なりに過去の掛川のことを振り返ってみました。

そこで、私からの提言ですが、掛川の町は過去を振り返ってみても、とても力のある町だと思っています。先にも述べましたが掛川市は全国に先駆けて生涯学習都市宣言をした町です。もっと掛川市民は胸を張って今まで実践してきた掛川を誇るべきだと思います。

特に榛村純一元掛川市長の著書『地域学のすすめ』から学ぶべき事が多いです。掛川市民は再読する機会を持つべきです。本の中では自らが住む町の自然、地理、歴史、文化等



図17 平山優(歴史学者)

(写真 中日新聞許可済)

を学び、地域社会に生きる人が、自らの人生と地域の活性化を一体的と考えてみようと述べています。その顕著な実践事例が新幹線掛川駅の実現でした。当時、掛川市の人口6万人足らずの町が新幹線駅を作ると言い出したとき、世間の誰もが信じなかったです。だが達成には不可能と思われた事が、掛川市民募金及び企業募金で29億5千万円もの額が寄進され昭和63年3月の新幹線掛川駅開業の実現に見事につながりました。当時、多くの家から10万から20万円の寄付があったと聞いています。このような掛川市民の結集した力に私は今でも大きな誇りを持っています。過去の事例を引き合いに出しましたが、全国初の木造建築による掛川城の再建もしかりです。このような過去の掛川の実践を振り返り、私は歴史とは何かを考えました。



歴史を学ぶとは・・・「伝える」「残す」といったミッション（使命）があります。地域には人が大切にしてきた環境があります。そして地域が誇りを持って守り残してきた歴史があります。

図18 新幹線掛川駅(資料 JR東海)

だからこそ、町づくりの在り方はもっともっとポジティブな思考で推進していく市の行政力や市民力の一層の醸成が求められていると思います。その気になれば、掛川の町は静岡や浜松にも負けない「家康の町」を全国発信ができる町であり、そのチャンスが「今」とであると声を大にしたところです。

6 主な参考文献及び引用文献

- 『高天神城の総合的研究』 平成5年発行 大東町教育委員会
- 『徳川家康―天下人への決断―』 令和4年7月発行 歴史人
- 『図説静岡県史』 静岡県史別編3 平成10年発行 ぎょうせい
- 『静岡県史通史篇2 中世』 平成9年発行 静岡県
- 『マンガ県史天下統一篇』 平成10年発行 静岡県 県教育委員会
- 『地域学のすすめ』 昭和56年発行 榛村純一
- 『わたしたちの掛川市』 平成14年発行 掛川市教育委員会
- 『掛川城攻防戦』 昭和16年発行 山崎常磐
- 『徳川家康』 平成27年発行 別冊太陽 平凡
- 『西郷の局物語 お愛さま』 令和元年発行 石野茂子
- 『遠江武将物語』 昭和61年発行 神谷昌志
- 『中日新聞夕刊記事 あの人に迫る』 令和4年5月20日（金）付け
- 『はらやー原谷郷土誌ー』 平成23年発行 原谷地域生涯学習センター
- 『原谷100選』 令和4年11月発行 原谷まちづくり協議会

『原氏家譜私考』 昭和 1 5 年発行 原義一

『遠江武将物語』 昭和 6 1 年発行 神谷昌志

『掛川三城ものがたり』 掛川市観光交流課発行

※ その他、参考資料多数あり